

(熊毛郡屋久町安房字春牧横峯)

位置と環境

遺跡は、屋久島の南東部の海岸段丘上（標高約78m）に位置する。海岸までは約1km、背後には前岳（965m）がそびえ、遺跡のすぐ側を竹女護川が流れており、湧水点も程近い。

調査の経緯

昭和62年、屋久島郷土誌編さん事業の一環として、鹿児島大学と町合同で発掘調査を実施した。その際の調査では、遺物包含層を2層確認し、鬼界アカホヤ火山灰は確認されなかったと報告している。

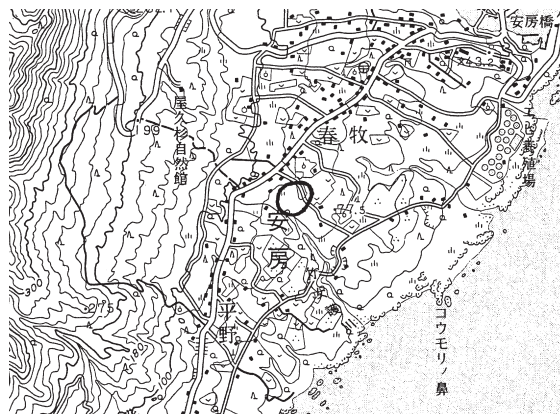
その後、平成11年度、町制施行40周年記念事業として「縄文の里整備事業」が計画され、それに伴い平成11年度～14年度まで屋久町教育委員会が主体となり、鹿児島国際大学などと調査団を組織し、確認調査を実施した。調査面積は、約2,500m²である。

遺構と遺物

これまでの調査では、縄文時代後期の遺物や遺構が発見された。遺構では、竪穴住居跡が100軒余り確認されている。住居跡は、狭い範囲に密集して切り合った状態で確認されており、土器型式等から、約300年の間に次々と建て替えが行われたものと考えられる。昭和62年の鹿児島大学による調査では、こうした住居跡の密集した部分にトレンチを設定しており、遺物包含層は、住居跡の埋土であったと考えられる。

住居跡は円形及び楕円形の形状で、長径約5～6m、床面は平らまたは浅いすり鉢状を呈する。中央に焼土が確認できるものも存在する。平成12年度の調査で完掘した住居跡（55号住居跡）では、中央部で支柱穴と思われる2つの土坑が確認され、さらにその土坑にはぎっしりと円礫を詰めた状況が確認された（第2図）。土坑の中に円礫を詰める行為が何を意味するのか、今後の検討が必要である。時期は、市来式土器を主体とするものと一湊式土器を主体とするものがほとんどで、いずれも縄文時代後期のものと考えられる。

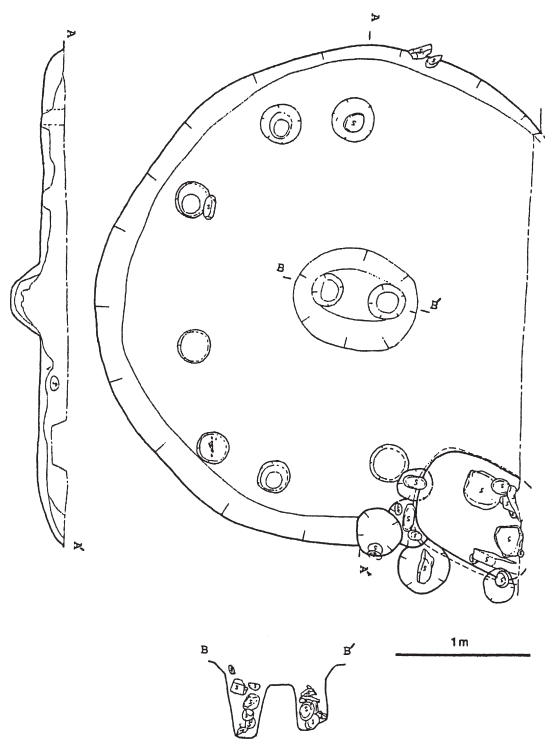
また、川に近い杉林の中では、土坑群・溝状遺構



第1図 屋久島横峯遺跡の位置

が検出された。これらも出土した土器から住居跡とほぼ同時期と考えられる。溝状遺構は、近くにある湧水点に向かってのびることから、道の機能をもった遺構である可能性が考えられる。

また、住居跡のほとんどが、アカホヤ層より下の粘土層を床面にするという特徴をもっている。鹿大の調査ではアカホヤ層は確認されていないが、その後の調査では、表土の下の比較的浅い部分でアカホヤ層が確認されている。住居跡の密度が高いために、結果的にアカホヤ層がなくなってしまったと推察される。



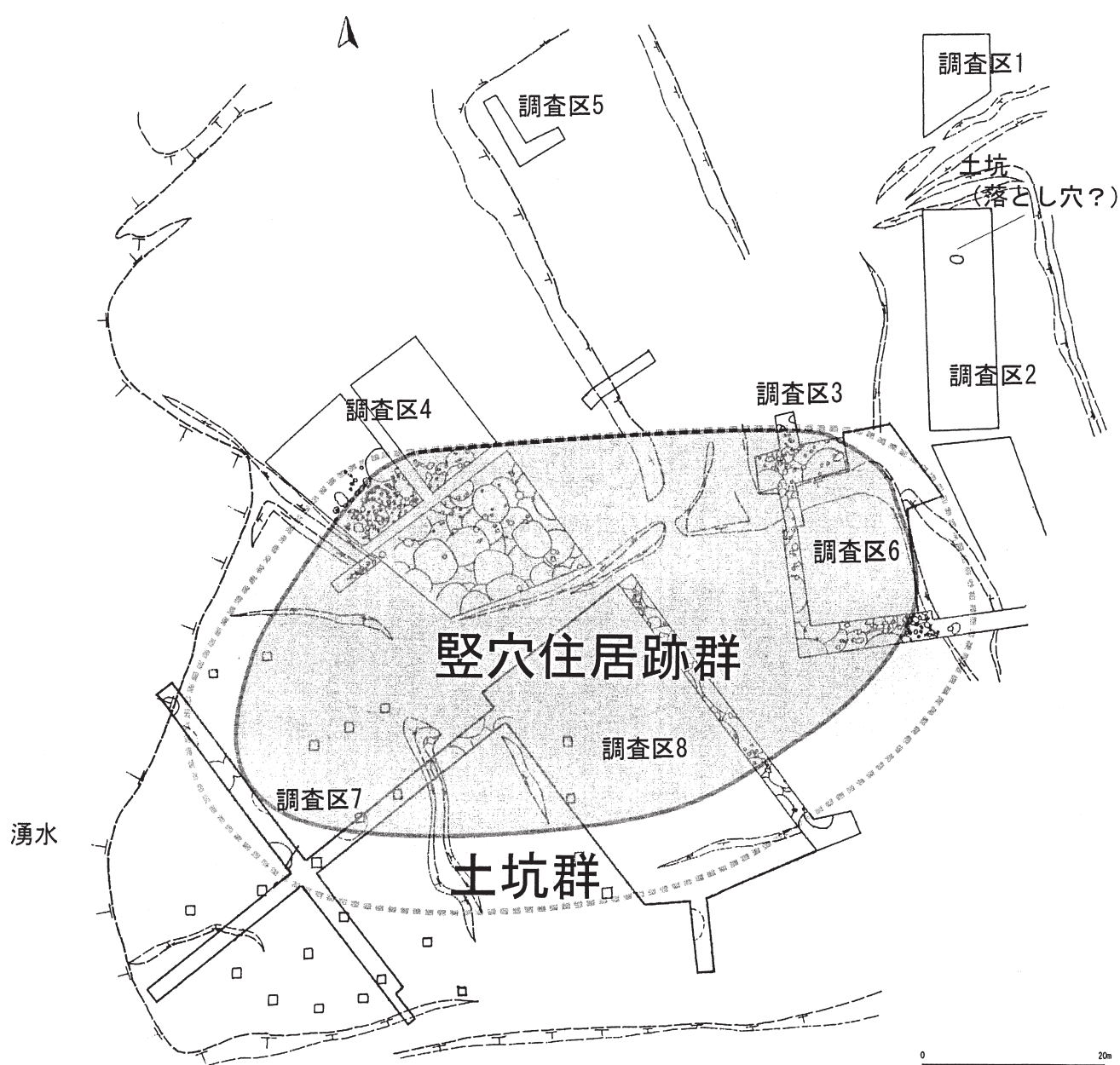
第2図 55号住居跡

住居以外の遺構では、住居跡群の周りを取り囲むように、土坑群が確認されている。これらの土坑の多くには、礫や石皿片が入れられており、掘立柱建物跡の柱穴である可能性が考えられる。土坑のほとんどは住居跡と同時期でよいと考えられるが、新しい時期の掘立柱建物跡の柱穴と思われるものも若干含まれている。

縄文時代後期の土器は、市来式土器、一湊式土器が主体で、まれに、松山式土器、納曽式土器、市来式土器の丸尾タイプ等が出土している。土器の胎土分析から、在地色の強い一湊式土器は、ほぼ全てに

黒雲母が含まれるが、市来式土器には黒雲母を含むものと含まないものの2パターンあることが判明した。黒雲母は、屋久島の基盤を成す花崗岩に豊富に含まれる鉱物であることから、黒雲母を含まない市来式土器は、島外から持ち込まれた可能性があると考えられる。

縄文時代の石器では、石皿、磨石、敲石、凹石等の礫石器が非常に多いという点が注目される。石皿は大型のものが多く、住居の床面ではなく、埋土中から出土するものが多いことから、住居の柱穴に円礫を詰める行為などとも合わせて、住居廃絶の何ら



第3図 調査の配置と遺構の分布

かの行為が行われていた可能性も考えられる。その他、磨製石斧やノミ状石器も出土しており、木材の利用が盛んであったことをうかがうことができる。

礫石器が豊富な一方、石鏃や石匙などの定形的な剥片石器が発見されていないという点が特徴に挙げられる。また、石錘など、漁労を示す遺物も出土していない。植物質食料の加工用石器類が非常に多いことと、動物質食料獲得用の石器が見られないことが何を表しているのか、今後の検討が必要である。

石材については、屋久島で産出する花崗岩、砂岩、頁岩、粘板岩がほとんどである。黒曜石等の持ち込みを示すような石器は、まだ発見されていない。一方、砂岩の緻密で硬質のものを薄く剥ぎ取り、スクレイパーとして利用しているものが見られる。剥片石器に適した石材が乏しいという石材環境を反映していることと推測される。したがって、遺跡内で見られる人頭大の砂岩礫は、石材として持ち込まれている可能性が考えられる。

そのほかに、土壌サンプルの自然科学的な分析も進めている。その結果、サンプルに含まれる炭化材の中に、ヤクタネゴヨウ (*Pinus armandii* var. *amamiana*) とみられるものが多数含まれていることが判明した。ヤクタネゴヨウは松の一種で、屋久島・種子島にしか分布しない絶滅危惧種である。おそらく、本遺跡が営まれていた時代には、周辺にヤクタネゴヨウが無数に生えており、住居の資材や燃料として、一般的に利用されていたのではないだろ

うか。

特徴

遺跡の所在する土地は、開発を免れ、遺構の残存状況が非常に良いという特徴がある。それにとともに、西日本でも突出した数の住居跡を確認している。これまで不明な点が多かった西日本の縄文時代について、周辺の環境も含めて総合的な復元が可能な遺跡であることが予想される。

また、自然科学的分析により、現在稀少種になっているヤクタネゴヨウについての歴史的情報を得ることができた。今後も様々な分析を行うことで、まだほとんど解明されていない先史時代の屋久島を紐解く鍵になることが期待される。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島国際大学で整理後、屋久町教育委員会に保管する予定である。

参考文献

屋久町教育委員会1989「横峯遺跡」『屋久町埋蔵文化財調査報告書』1

屋久町教育委員2004「屋久島横峯遺跡」『屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書』2

(金子 愛)



写真1 竪穴住居の密集状況（調査区8）



写真2 石の入れられた土坑